

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

女性サポート Asyl 事務局長の波田地利子さんを
グッドプラクティショナーに推薦する理由

女性サポート Asyl は、居場所を失った女性や母子のために、一時的な生活空間を提供し、新しい生活の基盤づくりのサポートをする札幌を拠点とする特定非営利活動法人です。2025年9月15日に創立10周年となり、シェルター事業や障がい者相談支援事業、居場所サロンなどを行っています。波田地利子さんは、制度内支援を軸としながらもそこからこぼれる個別ニーズにも丁寧に対応する相談支援を行うほか、各種プログラムのマネジメントやコーディネイト、地域を基盤とした行政や関係機関とのやりとり、そして資金調達やソーシャルアクションにむけた活動など、まさにミクロからマクロを見通した丁寧な実践を継続されています。女性支援における構造的視点を基盤においた実践は、まさにソーシャルワークそのものであり、かつソーシャルワークは人なりということをいつも感じています。

（推薦者：札幌学院大学 横山登志子）

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由（200～400字程度）を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する（3,200字程度）。

私の実践

シェルターから地域へ ーコミュニティづくりによる「尊厳ある日常」回復の取り組みー

波田地利子 (NPO 法人女性サポート Asyl 事務局長)

NPO 法人女性サポート Asyl (以下、あじー) は、「行き場を失った女性や母子のための一時保護と生活再建をサポートする団体」として 2015 年に設立されました。理念として「尊厳ある日常」を掲げています。主な事業として、札幌市生活困窮者自立支援事業であるシェルターの運営を行なっています。団体の特徴づけるのは、入所中の数週間だけではなく、その後の数十年間を支えることを目指した「コミュニティづくり」にあります。

背景

「女性の貧困」という言葉が、特に仕事を持ち自立しているはずの女性の貧困という意味で注目されるようになったのは、2010 年頃からでした。当時「単身女性の三人に一人が貧困」(国立社会保障・人口問題研究所) という発表は、衝撃をもって受け止められました。もちろん、それまでも明らかに女性の貧困は社会に存在していました。しかし、女性が「家」から出て独力で生きる選択をすれば生活苦に陥ることは、長い間、日本社会にとってあまりに自明のことだったので、わざわざ取り沙汰されなかったのかもしれませんが、家庭、学校、職場、あらゆる人生の段階に「女性であること」による抑圧の仕掛けがあり、力を奪われ、ついに自分の力だけでは立ちいけなくなってしまう人が、私たちのシェルターの利用に至ります。

困窮の原因が「構造的」である一方、解決はどこまでも「個別的」です。解決とは単に困窮や暴力がなくなった状態ではありません。ひとりひとりに個としての物語があり、この物語の回復が、ここでいう解決の意味になります。一見、問題が解決しているようで、過去の出来事による不可逆的なダメージにより生きづらさを抱えたり、時に自ら破滅的な方向に進んでしまうひとは少なくありません。過酷な経験をした人々が日々「生きていてよかった」と思えること、そうした終わらなき回復の道を、共に切り拓き歩む団体でありたいと思っています。

回復は、地域と仲間のなかで

ひとは生きる意味を、他者との関わりが織りなす物語から得ています。あじーは創立当初からコミュニティづくりを意識して取り組んできました。そのひとつが、市民ボランティアが支える「サロン」の実践です。

あじーの居場所サロンでは、「ボランティアの手作り昼食を、他の利用者やボランティア、職員と一緒に摂る時間」を週に 3~4 回設けています。昼食後には、シェルターの元利用者にもサロンを開放して、常駐するボランティアや他の利用者と雑談に興じたり、お茶を淹れてもらったり、時には編み物を教えてもらったりなど、思い思いの時間を過ごすことができます。現在 10 人のボランティアが昼食づくりや、サロン常駐などの活

動に従事しています。市民の参加は、現場に良い効果を生んでいます。職員と立場が異なるボランティアだからこそ出来る自然な交流が心の回復を促し、また様々な方が関わることが場の風通しの良さとなり、利用者の団体への信頼につながっています。シェルターは利用者の安全のために情報の秘匿性が非常に重要である一方、利用者自身はひととのつながりを必要としており、両者のバランスを追求した上にサロンは成立しています。

必要なことを、なんでも

シェルターを出たあと地域で続く数十年の生活を支えるためには、ありとあらゆる側面でのアプローチが必要です。私たちは毎年、過去の利用者全員に出す手書きメッセージを添えた年賀状を出したり、季節のイベントを開催することで、地域に孤独・孤立させないことを目指しています。また安定した生活のためには、基本的な生活スキルが必要です。あじーるでは、料理や金銭管理を学べるプログラムを常設しています。そのほか特技を活かしたステップアップを応援する事業を模索中です。2025 年は「あじーるまつり」と称してチャリティマーケットや商品コンテストを開催し、元利用者が自らグッズをデザイン・制作し、販売しました。またコンテストの表彰式は百人を超える来場者の前で行われ、温かく祝われました。現在はグッズの安定した生産販売を目指しハンドメイド教室を開講していますが、ここでは教える側も教わる側も、同じくシェルター利用者です。利用者が持つ力を場に還元してくれています。

シェルターから見える地域

地域で行き場を失った利用者が、帰っていく場所も地域となります。生活困窮者のシェルターは、地域のありかたが顕わになる場でもあります。例えば利用に至った背景を見ると、「重度の精神障害によって長期入院していたが、医療費の滞納により行き場がないまま強制退院となりホー

ムレス状態になった者」「虐待が発見されないまま 18 歳になり、児相の対象にはならないが依然として家庭状況に問題がある若者」「介護要員として家族を支えてきたが、日常的に家族から否定されることに耐えきれず自殺を考えて家を出た中年女性」…など、あらゆる社会問題が浮かび上がってきます。もし地域の力が底上げされれば、こうした人々は行き場を失わずに済むようになるかもしれません。生活困窮者支援の現場は、社会課題を社会に問い直し、現実を変えることができる種を持っているのではないのでしょうか。そのような意識から 2023 年、シェルターから見える社会問題をシェルターを利用した当事者とともに問い直す「もやもやスタディカフェ」という学習会プロジェクトが始まっています。

助け合うコミュニティをめざして

社会の中での役割は、誰にとっても尊厳や生きがいを与えてくれますが、「誰かを助けられること」は特に強い生きる意味となりえます。昨今、政治的には助け合いを自助（個人や家族）に押し込めて公的福祉を削減しようとするむきがありますが、この動きは大変危険です。シェルター利用者のほとんどは「家族」という閉じた関係の中の行き詰まりによって、行き場を失った人々です。血縁という限定的で選ぶことができない関係に、生存が左右される社会設計はいかに危ういか、肌身で感じます。大事なのは生存が公的に保障されていること、そのうえで個人がゆるやかに自分の意思でつながり、助け合い、生きる意味を紡いでいくことです。私たちは、赤の他人同士で助け合ってもよいのです。

最も新しい取り組みとして 2025 年には、シェルターの元利用者の「互助会づくり」に着手しました。きっかけは、シェルター利用者が地域で独り暮らしを始めたあとに「孤独死」などの不安を感じている声が、特に中高年の方から寄せられたことです。シェルターの利用者のほとんどは頼れる身寄りを持たないため、生活リスクを抱えているのは高齢者ばかりではなく、若者にも共通して

います。さらに言えば、これは普遍的な日本社会の課題でもあります。市内の他のシェルター団体と共同で互助会づくりに取り組んでいますが、もっと幅広い層に実践が広がっていく可能性を感じています。

「生きたい」という願いから出会いが生まれ、ともに生きるための助け合いが始まり、そしてひとりひとりの人生の物語が動いていく。そんな景色が見たいという思いで、今後も活動に取り組んで参ります。